

母子保健システム運営の効率化の研究

郡 司 篤 晃*
青 山 正 征**
北 原 久 枝**
加 納 清**

要約：大宮市における生後4ヵ月の乳児神経発達健診において、要経過観察、要精密健診としてチェックされた乳児を6ヵ月以上フォロー・アップし正常化したと考えられた乳児143名の腹臥位、背臥位、座位、立位の発達変化は、初回から正常と判定された乳児130名の発達変化とほぼ同様の獲得傾向を示すが、少なくとも生後4ヵ月から12ヵ月の間では一定の差を示すことが明らかになった。

研究対象：1) 正常児：昭和61年10月及び62年10月時点で、一次健診で正常と判断された乳児のうち、協力をしてくれた合計130名の乳児。

2) 要経過観察児（リスク児）：一次健診でチェックされ、二次健診でも要経過観察となり、三次健診で要精密健診としてチェックされ昭和58年4月から60年2月まで6ヵ月以上経過観察をし、正常化した143名の乳児。

研究方法：1) 正常児の2ヵ月毎の腹臥位、背臥位、座位、立位の発達評価値を分析して平均の発達直線を得る。

2) リスク児の2ヵ月毎の同様の発達評価値を分析して平均の発達直線を得る。

結果：大宮市における生後4ヵ月の乳児神経発達健診においては、一次健診にて保健婦がチェックし、二次健診にて小児科医が、三次健診においては小児神経科医がチェックして最終的に療育が必要か否か、経過観察が必要か否か等を決定している。このとき、経過観察が必要なこどもは、一体、正常と考えられるこどもとどのくらい差があるのか、大宮市の生後4ヵ月の乳児の正常な神経発達とは一体どういうものなのかがその基礎データとして必要になる。

そこで、今回は、前述のごとく、一次健診で正常と判断された130名の乳児を生後4ヵ月の時点から2ヵ月毎に、ボバースの運動発達評価表を用いて、生後12ヵ月以上まで追跡し評価した。

* 東京大学医学部保健学科保健管理学教室

** 大宮市中心身障害総合センターひまわり学園

また一方、これより以前に、三次健診にて要経過観察とされたリスク児143名を、2ヵ月毎に同様の発達評価をして、データを収集してあったものを用いて、分析し、正常児との運動発達評価の対比を試みた。

結論として以下のものを得た。

- 1) 正常児とリスク児の腹臥位、背臥位、座位、立位の発達変化をプロットすると、いずれもグラフのような直線に近似される。(図1.2.3.4)
- 2) 正常児の場合、理論的正常直線を凌駕するのは、腹臥位では2.39ヵ月、背臥位では2.68ヵ月、座位では0.74ヵ月、立位では0.97ヵ月で、非常に立位化が早いことがわかる。
- 3) リスク児の場合、理論的正常直線を凌駕するのは、腹臥位では9.45ヵ月、背臥位では8.57ヵ月、座位では7.82ヵ月、立位では9.64ヵ月で、座位の発達は比較的早い、立位化が遅れているのがわかる。
- 4) 正常児とリスク児の理論的正常直線を凌駕する発達変化の差をみると、腹臥位では約7.1ヵ月、背臥位では約5.9ヵ月、座位では約6.1ヵ月、立位では約8.7ヵ月となり、こ

の両者の間には、立位化を中心とした遅速の差がみられることがわかる。

- 5) 正常児とリスク児の発達直線は、ほぼ1.3ヵ月の差をもってほぼ平行に推移し、統計的に有意差があることがわかる。

考察：正常児とリスク児の腹臥位、背臥位、座位、立位の発達変化は、少なくとも生後4ヵ月から12ヵ月過ぎまでは、別々の発達を示すものであり、リスク児は、正常児と比べると抗重力姿勢の発達を中心に遅れることがわかった。これがリスク児としてチェックされた根拠となるが、この先12ヵ月以後、差が出てくるのかどうか、将来的には個人差の範囲に集約されてしまうのかどうかは、その後の検討を待つほかはない。

一方、健診システムの効率性からみると、リスク児と判定されたものが確実に正常児と異なる経過をたどるところから、このような集団健診システムも適確に運用することにより、健診効率を上げ得ることが逆に示唆される。したがって、今後はさらに健診の受診率の向上を目指す必要があるが、健診の重要性の徹底と細かな技術的配慮が必要となると思われる。

Developmental Change of Prone Position

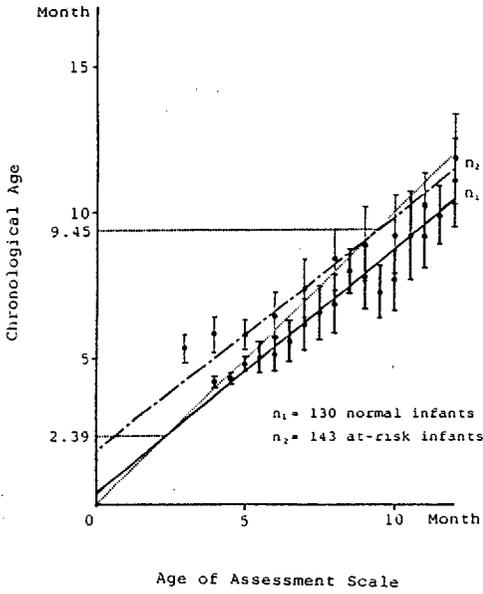


图 1

Developmental Change of Supine Position

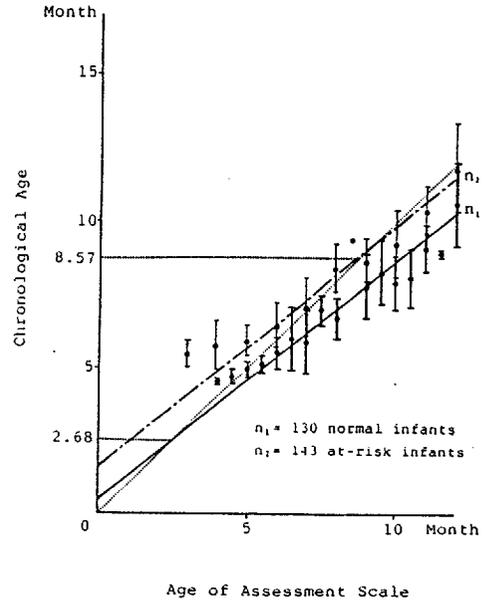


图 2

Developmental Change of Sitting Position

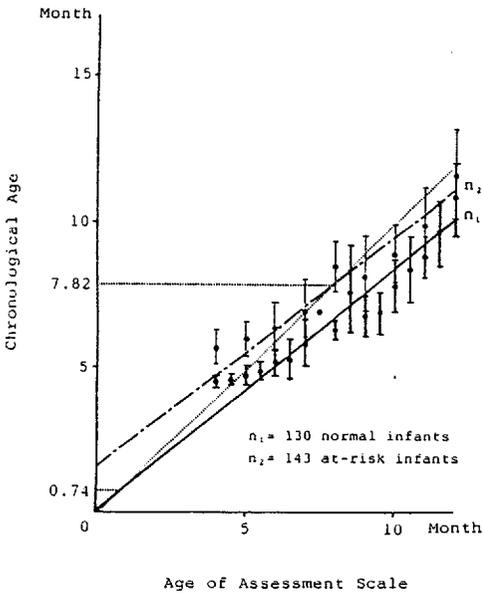


图 3

Developmental Change of Standing Position

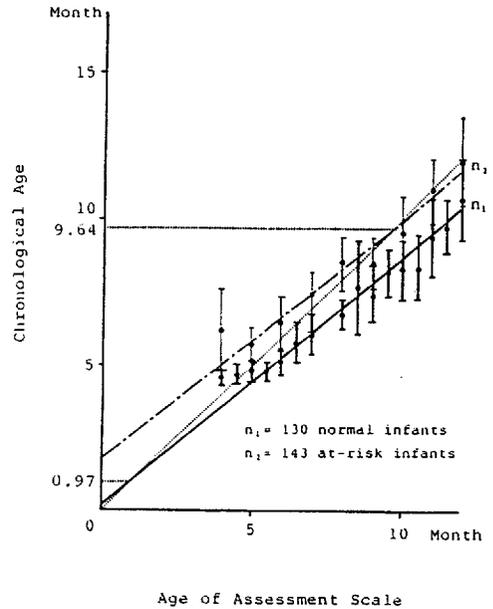


图 4



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:大宮市における生後4カ月の乳児神経発達健診において、要経過観察、一要精密健診としてチェックされた乳児を6カ月以上フォロー・アップし正常化したと考えられた乳児143名の腹臥位背臥位、座位、立位の発達変化は、初回から正常と判定された乳児130名の発達変化とほぼ同様の獲得傾向を示すが、少なくとも生後4カ月から12カ月の間では一定の差を示すことが明らかになった。